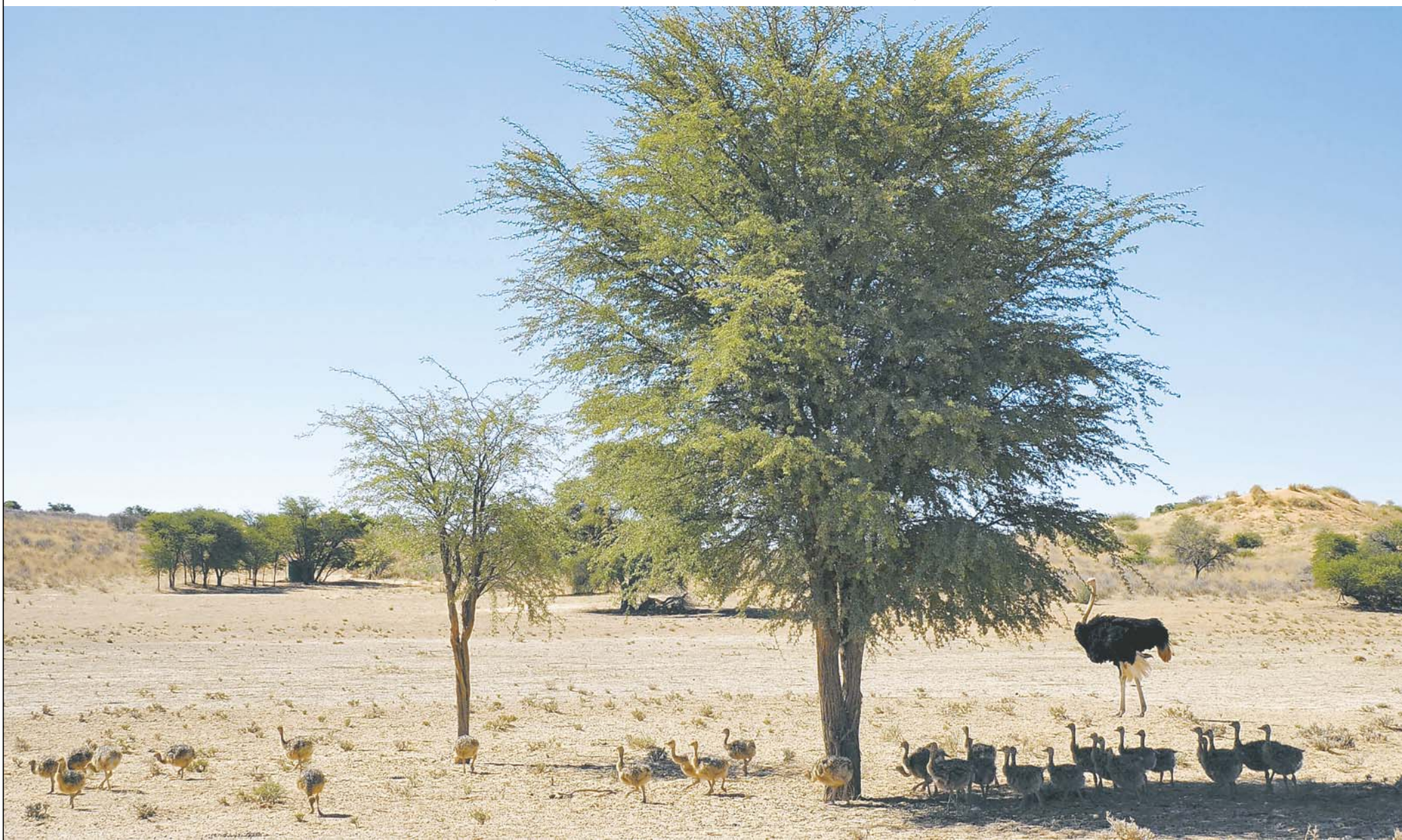


NATURE

# ネイチャー

三十数羽の雛を連れだした雄のダチョウ。日陰から出て行こうとする雛たちに付き添って、雄のダチョウも日なたへと出て行った

直射日光を避けて、木の幹に寄り添ってたたずむペールチャンディングゴスホーク(オオタカの仲間)



## 木陰に集う



# 夏本番、太陽を避けやり過ごす

日本では年の瀬が近づき冬を迎える季節、南半球の南アフリカでは夏本番を迎える。カラハリトランスフロンテニア公園やクルーガー国立公園では、僕がこれまで体験したことのない45度を超える気温になった。暑い。とにかく暑い。暑く感じていたせいか思ったよりは過酷な暑さではない。湿度が高くて、気温が上がる。耐え難いものだが、アフリカの乾燥した空気の中では、45度でも日陰に入ると涼しさを感じることが出来る。野生動物たちは、木陰を大いに利用して夏の暑さを乗り切っている。

厚衣になつて気温が40度を超える頃には、野生動物たちは木陰に集まる。ゾウもインパラもライオンもチーターも、多くの動物が日陰で寝そべって暑さをやり過ごす。単独や数頭で休息する肉食獣に対して、数十頭が集まっている草食動物。小さな木の下に大きな体のゾウが集まって、こじんまりとまとまっている様子はどこかニューモラスだ。

また、自分で日陰を作りながら活動するケープグラッドスクワラル(シリスの仲間)は、ユニークな存在だ。ふさふさの尻尾を、背中や背負って日傘のように立て、日差しを遮りながら活動している。日傘がわりの尻尾は、自分が行くところにつけてもついて来るので、太陽に背を向けているだけで効果がある。

哺乳類だけでなく、多くの鳥類も木陰で暑さをしのいでいる。ペールチャンディングゴスホーク(オオタカの仲間)が、木の根本の日陰となる側に寄り添って動かさず立ち戻している。地上で何をしているのかわからなくなったが、直射日光を避けてポットと立っているだけである。大型のフクロウの仲間であるシヤアントイゲルアウルも同じように木の幹に寄り添って眠る。地上に立っている。よく見るとあちらこちら木の根元に、直射日光を避けて猛禽類が立っている。普段止まっている木の上ではなく、地上に立ることには最初は違和感を抱いたが、この光景を見慣れてくると、暑い夏の風物詩のようなものだと思えてきた。

ダチョウが30羽以上の雛を連れて、木陰に入っている姿もある。雛たちは暑い中でおとなしくはしていない。活動的な雛たちに、親鳥は淡々日なたへと連れ出されている。木の上では、小鳥たちが集まっておしくまんじゅうのように押し出したたり押し出されたりしながら小さな枝の陰を奪い合っている。それだけの価値が木陰にはある。暑い夏、木陰は大にきわいだ。



1本の木の下に集まったゾウの群れ



ふさふさの尻尾を日傘のように使って活動するケープグラッドスクワラル(シリスの仲間)



木の枝が交差してできた日陰に集まったスクリーフェザードフィンチ(ハタオリドリ)の仲間。快適なポジションを得るために、おしくまんじゅうのように押し出したたり押し出されたりを繰り返していた

すどう・かずなり 1961年、京都府夜久野町(現福知山市)生まれ。イヌワシに魅せられ、滋賀を拠点に日本やアフリカで野生動物の撮影に取り組む。米原市在住。写真集「Golden Eagle イヌワシ」(平凡社)、DVD「ブラックイーグル」「ツキノワグマ」など。



次回1月19日掲載予定です